更新される死別と追悼のモチーフ

To the Lighthouse における古典への引喩（アリュージョン）

道家 英穂

本発表では、Virginia Woolf の *To the Lighthouse* に見られるウェルギリウスやダンテ、聖書への引喩から、現代においては、古代・中世には成り立っていた死者とのコミュニケーションが不可能になっており、宗教的な救いが得られないこと、そしてそれを補うものとしてこの作品が、何を提示しているのかを論じた。

To the Lighthouse では、主人公の Mrs Ramsay の死が、第 2 部第 3 章の末尾で唐突に語られる。

> [Mr Ramsay stumbling along a passage stretched his arms out one dark morning, but Mrs Ramsay having died rather suddenly the night before he stretched his arms out. They remained empty.] (II. 3, p. 105)

第 2 部の第 1 章と第 2 章の末尾では、Mr Carmichael がウェルギリウスを読んでいたことが繰り返し述べられ、それにより Mrs Ramsay の死とウェルギリウスに何らかの関連があることが示唆されている。ウェルギリウスの『農耕詩』第 4 巻に、オルペウスと妻エウリディケの別れの場面がある。冥界に連れ戻されるエウリディケはオルペウスに両腕を差し伸べ、オルペウスも妻の影をつかもうとする。また『アエネーイス』第 2 巻では、トロイア陥落の折にはぐれた妻を必死になって探すアエネーアスの前に、すでに命を落とした妻クレウーサが亡霊となって現れる。アエネーアスは別れ際に、三たび妻を抱擁しようとするが、妻の霊は彼の腕をすり抜けてしまう。この二つの夫婦の死別はいずれも悲劇的だが、夫婦の間に会話がある点が *To the Lighthouse* と異なっている。Woolf はウェルギリウスの二つの場面への引喩によって、現代において死とは無に帰すことであり、生者と死者のコミュニケーションは成り立たない、ということを強調したのだ。

死者とコミュニケーションを取ることができない現代において、よりどころにできるのは何だろうか？　その一つの答えが生きている者同士の心の交流である。そのことが、*To the Lighthouse* の第 3 部で、Mr Ramsay が同じ動作を 3 回繰り返す場面に示される。Lily は、女性たちの同情を引こうとする Mr Ramsay を慰めるすべを知らず、見当違いなことに彼の履いている靴をほめてしまう。ところがそれが意外な効果を発揮し、Mr Ramsay は心を和ませて靴を自慢し、二人の気持ちが通じ合う。そして Mr Ramsay は靴ひものうまい結び方を Lily に教えようと、「三たび彼女の靴ひもを結び、三たびそれをほどいた」という(III. 2, p. 127)。ここにも、アエネーアスがクレウーサの霊を三たび抱擁しようとする場面への引喩が見られる。Mr Ramsay の何気ない動作が、英雄とその妻との悲劇的な死別と対比されて、生きている者同士の和合の瞬間を象徴的に示すのである。

『アエネーイス』にある、死者の霊に対する三たびの抱擁の試みは、叙事詩に繰り返し描かれてきた。『オデュッセイア』第 11 巻では、冥界ハデスを訪れたオデュッセウスが母の霊に出会い、その霊を 3 回抱きしめようとする。また『アエネーイス』第 6 巻では、アエネーアスは極楽（エーリュシウム）で父の霊と対面するが、ここでも同じ動作が繰り返されている。さらに『神曲』のダンテは、煉獄で旧友カゼッラに出会ったとき、懐かしさのあまり、やはり 3 度抱擁しようとして 3 度とも失敗する（「煉獄篇」第 2 歌）。だが煉獄で罪を浄めて天国に行くことを約束されているカゼッラは、ほほえんで、ダンテにやめるようにと優しく言う。詩人ダンテは、カゼッラやダンテがこれから向かう煉獄や天国が、古代の叙事詩に描かれた冥界とは全く異なるところであることを示し、死後の救いという中世カトリックの死生観を強調する。『神曲』を愛読した Woolf はこの場面をも意識した上で、来世の救いに代わるものとして、生きている者同士の心の通い合いを提示した可能性が高い。

To the Lighthouse の第 1 部では Mrs Ramsay 自身がこの考え方を持っていることが示される。死を宗教的に意味づけできない彼女は、人とのつながりを切に求める。第 1 部の終わりの晩餐の場面で、Mrs Ramsay は会食する人々の心をなんとか一つにまとめようと務め、やがて皆が打ち解けてくると、「他の人々との感覚のコミュニティー」(I. 18, p. 92)を感じ、幸福感に満たされる。信仰心をもたない彼女は、こういう瞬間が自分の死後も人々の心に残り続けるという意味で「永遠なるものに連なっている」(I. 17, p. 85)と感じる。ここで、他者と心が通い合うような出来事の回想が、来世での再会に代わる意味をもちうることが示される。

第 3 部では、画家の Lily が、10 年前に完成できなかった絵に再度取り組みながら、Mrs Ramsay によって作り出された「友情と好意に満ちた瞬間」を回想している。それは Lily と Tansley が、普段は反目し合っているにも関わらず、Mrs Ramsay の前で無邪気な遊びに打ち興じたという、浜辺での何気ない出来事だった。Lily は、

この回想体験が、「人生の意義とは何か」という問いに対する一つの答えとなりうる可能性を示唆する。

> The great revelation had never come. The great revelation perhaps never did come. Instead there were little daily miracles, illuminations, matches struck unexpectedly in the dark; here was one. (III. 3, p. 133)

Lily には人生の意味を明確にしてくれる宗教的な啓示が与えられることはないが、日常性の中にあって輝きを放ち、いつまでも記憶に残る出来事が、それに代わる慰めを与えてくるのである。ここで Woolf は「大いなる啓示」として、『神曲』「煉獄篇」第 22 歌のスタティウスとウェルギリウスの出会いの場面を念頭に置いていたと思われる。Woolf の蔵書にある、Cary による『神曲』英訳と、上記の引用を比べると語彙の上での共通点が見られる。『神曲』のスタティウスはウェルギリウスに対し、『アエネーイス』によって詩への情熱をかき立てられたばかりでなく、（キリストの誕生を予言したと中世には解されていた）『第四牧歌』により、信仰にも導かれたと打ち明ける。スタティウスがウェルギリウスから 'great revelation'を受けたのに対し、Lily は Mrs Ramsay によって 'daily miracle'を見たと言える。そして彼女はそれを芸術によって表現しようとする。

Lily は、Mrs Ramsay が記憶の世界のなかに現出させた小さな奇蹟を、絵において現出させようとし、最後に至って絵を完成させる―「不意に力強く、一瞬それをはっきり見たかのように、一本の線を真ん中に引いた。できた、これで終わった（it was finished）。極度の疲労のうちに絵筆を置きながら、彼女は思った、そう私は自分のヴィジョンをとらえたわ」（III. 13, pp. 169-70）。ここの 'it was finished' という表現は、「ヨハネによる福音書」の、イエスの死に際の言葉 'It is finished' (19. 30) を踏まえていることが指摘されている。とすると Lily がつぶやいた 'it was finished' はイエスの言葉への引喩で、彼女が芸術に人生の意味を求めつつ絵に取り組み、ついにそれを完成させる、という結末は、芸術が宗教に代わりうることを示唆しているように見える。しかし Lily がヴィジョンをとらえるに到るまでの道のりは長く、完成したときには極度の疲労感を覚えている。Woolf は、芸術が宗教に取って代わることを全面的に肯定したというより、宗教がもはや与えてくれなくなった意味を、何とか芸術に求めようとする、その苦闘の姿を描いたといえるだろう。

Lily は最後のパラグラフにおいて、Mr Ramsay が灯台に到着したという意味でも'It is finished'と述べている。Mr Ramsay は、Mrs Ramsay が計画しながら悪天候で果たせなかった灯台行きを、彼女の遺志を継ぐかたちで実行する。この灯台行きは Mrs Ramsay の追悼という意味をもち、'It is finished'で、それが果たせた、ということになる。不可知論者の Mr Ramsay にも、妻を追悼する気持ちはあり、ここではその追悼の行為が、信者に復活と永遠の命を約束する、キリストの受難、贖罪とオーバーラップする。

その一方 'It is finished'は文字通り終わったという意味でもある。10 年間実行できなかった、追悼の儀式ともいうべきものを Mr Ramsay はやりおおせたことになる。また Mrs Ramsay を回想しながら、絵にとりくんできた Lily は苦闘の末、それを仕上げる。二人ともそれによって、Mrs Ramsay を失った悲しみから解放され、喪失感が癒やされただろうと考えられる。この作品の結末では、はっきりと述べられてはいないが、キリスト教的な来世での救いにとって代わるものとして「癒やし」も暗示されている。

以上のように *To the Lighthouse* では、古典への引喩によって、現代では、古代や中世には成り立っていた、死者とのコミュニケーションは不可能であり、その代わりに生きている者同士の心の交流や故人の回想があることが主張される。また宗教の代替物としての芸術の可能性が追求され、さらに死後の救いに代わって追悼と癒やしが暗示されている。最後に付言したいのは、引喩とは実は先行作品をオーバーラップさせる手法なので、必ずしも先行作品の考え方の全否定とはならないことである。現代の死を描いた場面でも、そこに古代や中世の作品への引喩があると、読者は死を永遠の別離であり無に帰すこととする考え方とともに、古代や中世の人間のように来世を信じ、死別した者とコミュニケーションをとることができたらいいのに、という願望も合わせて感じ取ることになる。*To the Lighthouse* はそれも含めた上での現代の死生観を描いていると言えるだろう。

Dante Alighieri. *The Vision: Or Hell, Purgatory and Paradise of Dante Alighieri.* Trans. Henry Francis Cary. P. F. Collier, 1909. Woolf の蔵書は 1921 年の Oxford UP 版.

Nadel, Ira. *Virginia Woolf.* Reaktion Books, 2016.

Virgil. *Eclogues, Georgics, Aeneid I-VI.* Trans. H. R. Fairclough, Loeb Classical Library, rev. ed. Harvard UP, 1936.

Woolf, Virginia. *To the Lighthouse.* Ed. David Bradshaw. Oxford World's Classics. 1992; Oxford UP, 2006.

ホメロス『オデュッセイア』全２巻，松平千秋訳， 岩波文庫，1994 年。

道家英穂『死者との邂逅―西欧文学は〈死〉をどうとらえたか』作品社，2015 年。